

2017年6月2日

KESエコロジカルネットワークプロジェクト
稀少植物の栽培実習その1

2017年度版

京都ゆかりの植物を守り育てましょう

植物の特徴および

育て方・栽培管理の注意

【午前の部】

9:30~11:30 育成方法について(座学)、植え付け実演

11:30~12:00 苗と資材等の引き渡し

【午後の部】

13:00~14:30 植え付け実習(植物ごとのコーナーで)

◆フタバアオイ

特定非営利活動法人 葵プロジェクト

◆ヒオウギ・カワラナデシコ・アヤメ

(公財)京都市都市緑化協会

講師:協会緑化リーダー 藤井 肇

協会緑化リーダー 秦 賢二

～ご案内～ **花とみどりの相談所をご利用ください**

(公財)京都市都市緑化協会の「花とみどりの相談所」では、草花や樹木の手入れなど「花」「みどり」についての相談を、専門家がお受けしています。お気軽にご利用下さい(無料)。

相談日 毎週 水曜日・土曜日 (12/28から1/4は休み)

時間 午前10時~12時、午後1時~4時

相談員 (水曜日)野^の杖 勝俊 (土曜日)原^は田 弘種

場所 梅小路公園(下京区)内「緑の館」2階 相談ブース

※電話による相談もお受けしています。 **直通 561-1980**

ヒオウギ（檜扇）

学名 *Iris domestica*

アヤメ科 多年草

環境省レッドリスト：記載なし

京都府レッドリスト：準絶滅危惧種

分布：本州・四国・九州・沖縄、台湾、中国大陸、インドなど

花期：7月中旬～9月



1 ヒオウギとは

ヒオウギの名前は、葉の重なり方が、貴族が使ったヒノキの板の「檜扇」を広げた姿に似ているためとも、緋色の花が咲く扇のような花であるためともいわれます。葉の色は緑色で少し粉白（ふんぱく）を帯びています。

アジア地域のおもに海岸部に広く分布し、日本全国の海岸の草地や海岸林、山の草地に広く生育しています。しかし、近年では、19の都府県で絶滅あるいは絶滅の危険がある種として区分されています。京都府レッドリストでは、準絶滅危惧種で、海岸や草地の開発、土地造成、園芸採取が減少の主要因とされています。

射干・射干玉 ヒオウギの根茎を乾燥させたものは、喉の炎症や咳（せき）を抑えるなど風邪に効く生薬「射干」として使われました。

文芸にもヒオウギが題材として登場しますが、古代の表記は「ぬばたま（射干玉）」「うばたま（烏羽玉）」です。これは、秋に一房当たり十数個ほどなる漆黒の玉のような種子のことで、黒、髪、夜、夢などの言葉などに係る枕詞として使われています。

紀貫之「うばたまの 我が黒髪や かはるらむ／鏡のかげに 降れる白雪」（古今和歌集四六〇）は、女性の気持ちになって、艶やかな黒髪が白くなっていく変わりようを嘆いています。（この歌は「かみやかは（紙屋川）」が詠み込まれていることでも知られます。）

祇園祭とヒオウギ 京都でヒオウギといえば、祇園祭の期間に、魔除け、厄除けとして飾られる代表的な花です。屏風祭りとして、山鉾町などあちらこちらの座敷や玄関にヒオウギの生花が飾られます。

祇園祭で飾られるようになった起源は定かではありませんが、池坊中央研究所によると、江戸・元禄期（1688-1704）の書物に、立花の中で、ヒオウギの古名である「烏扇」（からすおうぎ）が使われていた記録が残っています。理由としては「葉が扇状に広がる姿が美しく、花が少ない盛夏に次々と花を咲かせ、丈夫でつややかな色を見せる、水揚げがよく長持ちする」といったことが挙げられ、末広がりの縁起の良いものとして、町衆に定着していったと考えられています。



ヒオウギの種子



ダルマヒオウギの例(黄花)

2 ヒオウギとダルマヒオウギ

現在、一般に「ヒオウギ」として流通している花は、正確には、ヒオウギ *Iris domestica* の変種であるダルマヒオウギ *Iris domestica* var. *cruenta* f. *vulgaris* やその園芸品種で、自生種のヒオウギよりも草丈が低く、葉が幅広く密につき、品種によって花の色、葉の形などが様々です。江戸時代には多くの園芸品種が作出されていたようです。

京都府内で唯一の生産地である宮津市では、切り花用として、毎年約2万本ものダルマヒオウギが栽培されていて、出荷の様子は、本格的な夏を告げる風物詩となっています。ヒオウギを飾る風習が徐々に失われつつあることから、2015年からは宮津市の生産者、流通関係者などで作る「京都府花き振興ネットワーク」が、山鉾町に呼び掛けてもっとヒオウギを展示してもらおう働きかけを始めました。

なお、ヒオウギを夏の期間に飾る風習は、大阪の天神祭などでもあると文献に書かれています。実際、2015年7月の天神祭のクライマックスの「本宮」の日、大阪天満宮近くの筆筒店のショウウィンドウにダルマヒオウギが大事に生けられていました。ご主人にうかがうと、「先代から天神祭の期間中に飾るように伝えられ、それを守っている」とのことでした。また、近隣の花屋さんでは今でも祭りの期間にヒオウギを勧めている、だんだんと減ってきたが、昔はもっと多くの店先などで飾られていた、とも話されました。



大阪・天神祭期間中に飾られていたダルマヒオウギ(大阪市北区「宮地筆筒店」で)

3 ヒオウギの栽培

今回栽培するのは、自生種のヒオウギで、京都市内に自生していたものを実生(種子からの栽培)で殖やしてきたものです。

<夏~秋の育て方>

- 日当たりの良い場所を好みます。水気にも乾燥にも強いのが特徴ですが、盛夏は、乾燥させすぎないように注意してください。
- 液肥(ハイポネックス等)を薄めて水やりの代わりに2週間に一度与えるか、マグアンプK(小粒)(2か月に1回、1鉢に小さじ一杯程度)、または発酵油粕(1か月に1度、1鉢に数個)などの追肥を与えると生長が早くなります。
- 花期は、概ね7月下旬から9月くらいです。十分に育った株であれば、扇型の中央の葉の中にぷくっとした花茎が入っており、不思議と、祇園祭の山鉾巡行が近づくと、すると花茎が伸びて、咲き出します。もし今年咲かない場合は、もう1年待ってください。
- 花は終わると、少しずつ花びらを雑巾を絞るように、たたんでいきます(右写真)。その後、さやが膨らみ、中の種子が黒く熟し、10月中にさやが自然に弾けます。一房で10~20粒程度の種子が出来ます。



<冬越し～春の育て方>

- 宿根草なので、11月以降は地上部は枯れてきます。冬は、葉が枯れてしましますが、根茎は生きており、翌春には芽吹いてきます。
- 寒さ・霜には比較的強く、鉢植えのまま屋外で冬越ししても大丈夫です。
- 冬季は、水やりを控えます。乾燥させすぎない程度（数日に1度）に、水をやってください。早春になったら、少しずつ水やりの頻度を多くしてください。
- 大きくしたい場合、地植えしても良いでしょう。

<殖やし方>

9～10月に種を採取してそのまま「採り播き」（種子を採ってすぐに土に播くこと）をするか、年が明けた2～3月に播きます。土質はあまり選ばず、市販の山野草の栽培に使われる土でかまいません。

ただし、採取した種を繰り返し育てていく場合は、ダルマヒオウギと交雑していないか、姿形をよく見て注意することが必要です。

何年目かに大きな根茎に育っていたら、春先に株分けして殖やすこともできます。

<病虫害>

特に心配はいりません。毛虫・青虫がつきやすく、見つけた場合は取り除いてください。

メモ

カワラナデシコ（河原撫子）

学名 *Dianthus superbis* var. *longicalycinus*

ナデシコ科 多年草

環境省レッドデータブック：記載なし

京都府レッドデータブック：記載なし

分布：本州、四国、九州、沖縄諸島の一部、朝鮮半島、中国、台湾

花期：4月下旬～6月、9～10月（関西地方）



1 カワラナデシコとは

淡紅色（まれに白色）の5枚の花弁の先が、糸状に細かく分裂する優美な姿をしています。日本女性の清楚な美しさをいう「大和撫子」（やまとなでしこ）の別名を持ちます。

サッカー日本代表女子チームの愛称「なでしこジャパン」は、「大和撫子」のイメージもあって2004年のアテネオリンピックの際に公募を経て採用されました。山上憶良が詠んだ秋の七種(くさ)である「萩の花 尾花 葛花 瞿麦(なでしこ)の花 女郎花 また藤袴 朝貌(あさがお)の花」(万葉集巻8、1538)の中では、今や、最も有名なのがナデシコといっても良いでしょう。

ただ、「大和撫子」という名は、古代、中国から渡来したと考えられる唐撫子（カラナデシコ）と呼ばれる石竹（セキチク）*Dianthus chinensis* と区別する名であり、日本固有種だからというわけではありません。本州～九州のほか、沖縄諸島、朝鮮半島、中国、台湾と広く分布し、むしろ、有史以前からの東アジア一帯とのつながりを感じさせる植物です。

2 「人くさい植物」

氷期（氷河期。最終は約1万年前まで）に大陸から日本列島にかけて広がっていた、草甸（そうでん）と呼ばれる草地の植生の名残といわれ、「火入れ」で維持されてきた阿蘇（熊本県）、秋吉台（山口県）などの広大な草原や、中山間地域の棚田周辺の里草地、川べりなど草刈りが行われる半自然的な草地に多く自生するため、俗に「人くさい」といわれる植物の1つです。前項オミナエシやキキョウなど、古くから親しまれてきた草花には似たような分布をするものが多くあります。

京都府では、レッドデータブックに記載されていませんが、農業の衰退による里草地などの変化により、自生地は減ってきています。7都県のレッドデータブックで絶滅のおそ

れがある種に区分され、神奈川県などでは地域で再生する活動も行われています。

3 秋の草？

「なでしこ」は、万葉集の山上憶良の歌以来、しばらくは秋の花として扱われました。

例えば、平安時代前期の歌人、素性法師（～909頃。三十六歌仙の一人。桓武天皇の曾孫）の歌（古今和歌集 244）に「我のみや あはれと思はむ きりぎりす／鳴く夕かげのやまとなでしこ」（こおろぎが鳴く夕暮れの光の中に見えるこの美しい大和撫子を、私だけがしみじみと美しいと思うのだろうか。）があり、秋の一抹の寂しさとともに歌われています。（古語「きりぎりす」は現代のコオロギの意。）

しかし、早ければ初夏に咲き始めることや、セキチク系の品種・常夏（とこなつ）などと区別されず、単に「なでしこ（瞿麦）」と呼ばれていたことから、平安期の勅撰和歌集では、夏の季語とされることがむしろ多かったようです。

4 親しまれるナデシコ

カワラナデシコが属するナデシコ属、いわゆるダイアンサスには、非常に多くの種・品種があります。

母の日に贈られるカーネーションは、「オランダナデシコ」などの別名がありますが、ヨーロッパ産のナデシコ属の種を元にしています。

また、ヨーロッパの原産で、日本では秋まき・春咲きの‘美女ナデシコ’や、‘美女ナデシコ’とセキチクを掛け合わせた‘四季咲きナデシコ・テルスター’など栽培しやすい品種が流通し、寄せ植えや花壇の植栽として、広く親しまれています。



‘四季咲きナデシコ・テルスター’

日本に自生する近縁種には、エゾカワラナデシコ *Dianthus superbus* var. *superbus*（本州中部地方以北、北海道、ユーラシア中部以北に分布）などがあります。

京都市上京区の門跡寺院・宝鏡寺には、‘イセナデシコ’（伊勢撫子）が江戸時代から伝えられています。カワラナデシコとセキチクの交雑種から作出されたといわれ、カワラナデシコの何倍も花卉が伸びる珍しい品種です。

漢方の分野では、カワラナデシコ、セキチクとも有用で、開花時の地上部の全草を「瞿^{くばく}麦（草）」、熟した黒い種子だけ集めたものを「瞿^{くばくし}麦子」といいます。消炎・利尿・通経などの効果がある生薬となります。



花卉が糸のように垂れる宝鏡寺のイセナデシコ。「京のみどり」32号(2004年秋号)より

5 カワラナデシコの栽培

今回栽培するのは、京都市内に自生していたものを実生（種子からの栽培）で殖やしてきたものです。

＜夏～秋の育て方＞

日当たりが良く、水はけ、風通しが良い場所に置きます。河川敷でも自生するほどで、比較的乾燥には強い植物です。

生育期には、表面の土が乾いたら、たっぷりと水をやります。土が乾いていなければ水やりは控えてください。

草丈は30～80cmほどになりますが、茂ると横に這うように茎が倒れます。必要に応じて、支柱などで誘導してください。

京都では、初夏に一度咲きますが、秋にも咲きます。秋にきれいに咲かせるためには、種子をつけたままにして生長を止めないようにすることや、梅雨の時期に蒸れないようにすることが大事ですので、初夏の花後に、切り戻しを行います。

花が終わった茎を順次、切り取ります。このとき、できれば株元近くでカットし、茎を間引くと風通しが良くなります。草丈が全体的に低い場合は、花後に、3分の1から2分の1程度刈り込みます。

＜冬越し～春の育て方＞

冬に地上部は枯れますが、根は生きています。鉢植えの場合は、なるべく霜がかからない場所に移動します。

冬でも乾燥させすぎない程度に、数日に1度は水をやります。

鉢植えの場合は、根づまりを起こしやすいので、できれば春先か秋に、古い根を一部切り、新しい用土に植え替えると元気になります。

春先から初夏にかけては、生長を促すため、月に1回程度の置き肥をします。

＜殖やし方＞

花後に、細かい種子がたくさんできます。これを取り撒きします。適期は京都では9月～10月です。

また、挿し芽も可能です。適期は成長期の4月～6月頃です。花穂のついていない芽を切りとり、水揚げをしてから、赤玉土などの用土に挿します。挿してから1週間程度、半日陰で水を切らさないようにし、発根するのを待ち、徐々に明るい場所に移します。

メモ

アヤメ（菖蒲）

学名 *Iris sanguinea*

アヤメ科 多年草

環境省レッドリスト：記載なし

京都府レッドリスト：絶滅危惧種

分布：本州・四国・九州・沖縄、台湾、中国大陸、インド、シベリア東部など

花期：5月～6月



アヤメの花の模様

1 アヤメとは

日本やアジアなどに広く分布するアヤメ科アヤメ属 (*Iris*) の多年草です。

乾燥に強い植物で、初夏には優美な青紫色で8 cmほどの大輪の花を咲かせ、庭、花壇などの植栽として涼やかな風景を作ります。

京都府内ではもともと自生地は多くなく、近年シカの被害を受けてさらに減りつつあります。京都府レッドデータブックでは「準絶滅危惧種」（2002年版）から、「絶滅危惧種」（2015年版）にランクアップしています。

栽培品種はさほど多くなく、白花の白あやめ、矮性のチャボアヤメ、内側の花弁が発達し六英咲きのようになるクルマアヤメ、北九州市に伝えられた戸畑アヤメなどがあります。



冷泉家に伝わる白花の品種

2 姿が似た植物、名前が同じ植物

同属のカキツバタなどとの区別 アヤメは「いずれあやめかかきつばた」と言われるほど、カキツバタ（杜若、*Iris laevigata*、京都府準絶滅危惧種）と優劣つきがたい美しい花を咲かせます。

アヤメの漢字表記は「菖蒲」「溪蓀」などですが、江戸後期以前の和歌などに登場する表記「菖蒲」は、ノハナショウブ (*Iris ensata* var. *spontanea*、京都府準絶滅危惧種)（及びその栽培種ハナショウブ）やサトイモ科ショウブを指すことが多く、どの植物を指すのか判然としないこともあります。

姿の良く似たカキツバタ、ハナショウブとの区別ですが、カキツバタ、ハナショウブが湿地性であるのに対し、アヤメが陸生であることでまず区別できます。それぞれの花は、ハナショウブの花期は6月から7月で、赤紫色の花びら（外花被片）の爪部（基



アヤメ

部)に黄色の筋の模様が入ります。カキツバタの花期は5月～6月で、白～淡黄色の細い筋のような模様が入ります。これに対し、アヤメは花期は5～6月、花びらの爪部に黄と紫の文目(あやめ)模様(網目模様)があるのが特徴です。

また、アヤメの草丈は、通常30～40 cm、大きくなると60 cmくらいですが、ハナシヨウブ、カキツバタに比べてやや背丈は低く、花の大きさも少し小ぶりです。アヤメの葉は細身で、カキツバタは幅広く、ハナシヨウブはその中間。ハナシヨウブの葉の中肋(中央を縦に通る主脈)は、太く、白っぽくはっきりとしています。

あやめふく(菖蒲葺く)はシヨウブ 平安の昔から、5月の端午の節句に、京の都の家々などで行われていた「あやめふき(菖蒲葺き)」の風習(軒に菖蒲を挿す、門に飾る)は、菖蒲湯に使うサトイモ科シヨウブのことです。

端午の節句は、奈良時代に中国から伝わった行事、風習ですが、シヨウブには厄除け、魔除けの力があると考えられていました。

花あやめ 和歌では、「花あやめ」と言うときは、特にアヤメを指しています。

花あやめ一夜に枯れし求馬(もとめ)哉(かな) 芭蕉

貞享5(1788)年のちょうど5月5日、京の宿で、松尾芭蕉が詠んだ句です。前の日に、四条河原で見た大坂の人気歌舞伎役者、まだ若い吉岡求馬が急逝したことを知り、その死を悼んだ句です。アヤメのように華があったのでしょうか。

ヒオウギアヤメ 近縁種にヒオウギアヤメ(*Iris setosa*)があります。

花期は6～8月、花は紫～青色で、和名の「ヒオウギアヤメ」は、花がアヤメに、葉がヒオウギに似ることによります。アヤメとも、ヒオウギとも異なり、自生地は湿地のみです。

3 アヤメの栽培

今回栽培するのは、自生種のアヤメで、京都市内に自生していたものを株分けで殖やしてきたものです。

<夏～秋の育て方>

- 風通しが良く、日当たりの良い場所を好みます。日陰では花つきが良くありません。陸生で、乾燥には比較的強いのですが、鉢植えの場合は、用土が乾いたら水をたっぷりやります。
- 水はけの良い用土を使います。
- 大きく育てたい場合は、地植えにします。地植えの場合は、真夏のよほど乾燥した場合以外は、水やりは不要です。
- 5～6月ころの花が終わったらすぐ、遅くとも7月初めまでに植替えを行いましょう。



「菖蒲葺き」の例
(祇園界わいの茶屋で)



ヒオウギアヤメ

鉢植えでも、地植えでも、根が詰まると全体が弱ってきます。

- 植替えは、7号鉢なら、3芽くらいが適当です。
- 種子を採る予定がなければ、花後の花がらは摘み、花茎はカットします。
- 液肥（ハイポネックス等）を薄めて水やりの代わりに2週間に一度与えるか、マグアンプK（小粒）（2か月に1回、1鉢に小さじ一杯程度）、または発酵油粕（1か月に1度、1鉢に数個）などの追肥を与えると生長が早くなります。

<冬越し～春の育て方>

- アヤメは宿根草なので、11月以降は地上部が枯れてきます。冬は、葉が枯れてしましますが、根茎は生きており、翌春には芽吹いてきます。
- 寒さ・霜には比較的強く、鉢植えのまま屋外で冬越ししても大丈夫です。
- 冬季は、水やりを控えます。乾燥させすぎない程度（数日に1度）に、水をやってください。早春になったら、少しずつ水やりの頻度を多くしてください。
- 植替えを、3月に行うこともできます。
- 3月に肥料を与えると、春先の生長がよくなります。



3月中旬のアヤメの新芽

<殖やし方>

- 花後の植え替え時（6月頃）または3月頃に、株分けにより、殖やすことができます。
- 実生（種子）で殖やすこともできます。7～8月中に種を採取してそのまま「採り播き」（種子を採ってすぐに土に播くこと）をするか、翌年2月から3月上旬までにまきます。採りまきの方が発芽は良いでしょう。

<病虫害>

特に心配はいりません。毛虫・青虫がつきやすく、見つけた場合は取り除いてください。

メモ
